

おおよまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成13年
12月号

毎月23日発行
通巻376号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成13年12月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>

「杉山の木」の前で (龍丸さんの長男)
村長さん・2人のお孫さんと杉山満丸さん



緑の父と呼ばれた日本人



インド・ハリアナ州シュワルク・レンジ
杉山龍丸さんのお陰で緑に変わった山

本文4頁 写真提供：杉山満丸さん

昭和45年5月23日『すさのお』第44号より再録
かん

神ながらあるのみ

法主 矢追 日聖

あれから二十五年になる。「神ながら」という唯だ一つのネタを翳して、その法だの道だのと、まあよくも厭きないで永年の間喋ったり、書いたり、行動したりしてきたものだが、頭に雪をかぶる昨今になって時々振返る気になることが多い。先が短くなつたせいかも知れない。今日まで大倭を訪れた無数の人々に、果たして幾人、私の言わんとする心情が通じたろうか、自信がない。

私にしてみれば、そんな些細なことを考えるのが間違いで、私はただ使命観によってなすべきことだけを素直に実行するだけでよいのだ。私が自覚する使命観は誠に重たい、然しそれに伴う仕事は朝飯前である。そのせいか、お陰さまでこの年になるまで病気の経験がないことと衣食住には何一つこと欠かない恵まれた星の下に生まれ合わせたことは、どう感

ミコト(使命)のままに

法主寸言

- 神ながらは
- 一人一人の生命だけでなく
 - 一つの民族の生命にも
- 流れている

昭和44年10月23日『すさのお』第37号より

謝してもなお余りある。願うことはただ静かに大地の穴へうまく納まりたいことだけである。

この間、大阪梅田の地下街で迷った。まるで蟻の巣へ落ち込んだような雑踏である。右往左往する人々の群を眺めていると、若し五十年たてば自分も含めてこの人々の殆どがこの世に居なくなる。百年たてば誰もが生きていない。こんな決定的な現実も知っていることと思うが、果たしてその来るべき真実を知った上での暮らし方をしている人は、幾たりあるであろうか、など思いつながらブラブラしている。飲食街へ入っていたのに気が付いた。時刻でもあったので鰻めしを食べた。美味しかった。死ぬことを考えていても現実にはこんな舌鼓で喜べることもある。ここが神ながらの味だろう。おかしくなった。こんな気随気ままな独走的な人間に何の因果か愛想つかしもしないで多くの人々が慕ってついてくる現実、どう考えても不可思議なことである。

私が言う「神ながら」の宗教は、自然から受ける感応、つまりあらゆる動物的本能によって加美を知り、加美の心に柔順である「比登」になるための教えをさして言うのである。だから仏教、キリスト教で言う如き教祖はいないし、更にまたそれに伴って作られた教典もない。周知の如く教典は釈迦やキリストが自ら作ったのではない。彼等の死後において弟子達と称する者が、銘々師匠から教えられた事柄などを自分の知能の範囲内でとらえた主観に基づいて纏めたものに過ぎない。真面目に考えてみれば、弟子達はどこまで師匠の真意を受止めているのか、はなはだ疑問である。

真の宗教に目体我はない

何かの動機で、天地自然の中から、何かを悟つ

たという種類の人であれば、「神ながら」という言葉は使わないにしても、私が言う「神ながら」の法を説明し、更に人間としての歩むべき道を実践によって示してきたと思う。釈迦、キリストにしても彼等の御降誕の時代、誕生地の地理的環境そしてその時代の社会的なあらゆる事象等の中にあつて、自ら受けた天啓的正覚と使命観によって当時の身近な社会の人々に流布したというだけである。従つて、釈迦、キリストといえども「神ながら」の総てを教えているのではない。使命の範囲内に於ける「神ながら」を説いているのである。恐らく御自身御在世中には、現代に見るような団体我のお手本みたいな強大にして部派分裂、互いに勝負を競うような大教団に転化するなど夢にも知ることができなかったらうと思う。

日本国には、現代、秋に見る各種キノコ類のように所謂、教祖と称する人が各地で群生している。人ごとではない、私もその中の一人に数えられているらしい。

真相を言うならば、私はただ生来のミコト（使命）に順応した生き方さえすればよい。私のミコトは、私だけに加美が命じ給いしもので、加美はミコトに忠実であるだけを望んでいる。だからミコトを果たすための方法手段として、現代の社会的任組みにしたがって宗教法人大倭教を昭和二十一年に設立した。社会的には公認された宗教団体である。若しこれが組織によって統轄する世間並の団体の性格をもつとすれば、その目的とする宗教本来の根本的要素を正に根底から破壊することになる。

だから宗教法人である大倭教は名ばかりで、實質的には宗教団体ではない。但し、「神ながら」を信仰して大倭に集う多くの人々は、矢追日聖という個人と心の生活を共にしている同胞（はらか

ら）と言えよう。此の人々は組織なき組織に結ばれて各々の動きを示している。現代みる多くの宗教団体は、宗教を商品に見たてた宗教企業の会社に等しい。心眼を開いて自己をよく見つめる時ではなからうか。

神ながらは絶対である

「神ながら」は絶対である。しかし私が説く「神ながら」はその一部分の表現で、その総てではない。つまり、私は明治四十四年に大和の西北、生駒山の東に当たる登美の里に生を受け、昭和の敗戦後の社会に於いて、更に先天的人間性、といった諸条件から感応してくる「神ながら」を開顕し、時代即応に其れを実践しているまでである。

魚は水中を泳ぐ、鳥は空中を飛ぶ、馬は足で走る、蛇は腹で這い歩くなどは、誰が見ても不思議とは思わないであろう。これらは、加美が定めた本能習性（ミコト）であるからだ。ここに各々がもつ尊さがあるので、偉いと言えるものは此の世には絶対あり得ないのだ。私はあたりまえのことをしていただけである。過去世や現代の中に聖賢者と称せられる人は無数にある。彼等を顔の皮とすれば私は肛門の皮である。

（昭和四五・五・一二 日聖記）

法王の言葉

▼神ながらは人の為にあるのではない。それを識れば、その人にとってふさわしい人生が送れるのである。（昭和44・9・23『すさのお』第36号）

▼自分を犠牲にして表面を丸くおさめる。これは加美ながらの調和ではない。

▼肯定も否定もこえて、加美ながらはある。（昭和46・3・23『すさのお』第54号）

（昭和46・11・23『すさのお』第62号）

平成13年10月28～29日 第267回大倭会文化行事報告

龍神に迎えられた山陰旅行

杉本 順一

前回の大倭会文化行事の出雲旅行について『おおよまと』平成元年十二月号通巻二二三号に法主様が記事を書いて下さったものがある。

それを読みかえして気になるところがあった。『昔から神の国出雲と云われ然もこの熊野大社で一体の龍神霊も頭われなかつたということが解せなかつた。だが今日一日が素晴らしい晩秋のお天気であったことは龍神不在を意味しているので領けたのである。私にとつては珍しいことで、大抵の古社には龍神がいて初めて詣る時には必ず多少なり雨を降らせて挨拶に頭われるものである。古社にはその背後に必ず神体山（神奈備）があつてその山に大小色とりどりの龍神がいる。霊界では人格神より龍神の方が上位になつている。』

と書かれた部分である。私個人のことではあるが、今年になって急に龍神さんとかかわりが続いたので、そこが妙に気になつたのである。私の故郷奈良県榛原町の墨坂神社と、日光の二荒山神社、十津川村の玉置神社をお訪ねしなければならなくなり、そのいずれでも龍神さんにご挨拶をしたからである。

これまでは龍神さんと言つても遠い存在の様に思つていたし、どうして急に今年は「龍神さん」なのか私には不可思議なことである。

いよいよ十月二十八日旅行当日の朝、奥津斎庭で挨拶すると「ワレラ カンナガラ ヨクミテオケ」と金剛大龍神のお言葉を感応する。「よく見ておけ」とのことであるが、「何を見ればいいのか」と独り言をいながら法主様の奥津城

に参る。法主様は「タノシンデ コイ」「ワレラ モトモニ マイルベシ」と言つて下さつたので、先の心配はしないで楽しもうと元気に出発した。吹田を出たあたりから少し空が雨模様となつてきた。

舞鶴の藤本宏秋さんが加西サービスエリアで待つていた。彼は自分の車でバスについてくること。真夜中に舞鶴を出てここで仮眠をとつての参加である。

龍神さんからのお言葉だったので空ばかり気にするバス旅行となりそうである。加西SAを出た頃から雨は本格的になつていた。高速道路から見える近くの山々からは雲がどんどん立ちならんでいた。八雲たつとはこんなことか？と妻と話す。

途中、蒜山休憩所あたりでは風は強いがほんの少し太陽が顔を見せてくれた。ガイドさんも「何でしょうね。今日の天気は」と言うくらい空が変化する。あとはまた雲が空一面におおつていた。

米子自動車道最後のトンネルを出て瞬間、右側に大山が見えた。晴天の空に山頂がはつきり見える。車中に「ウォーッ」と歓声がわき、拍手がなる。その間わずか一分たらず。あつという間に頂上は雲にかくれてしまう。

こわい程のタイミンクである。「かんながらの三要素は、時、所、人」と法主様から教えていただいたことを思い出させてくれる神わざであった。「今日の大山は、あきらめていたのに……」とガイドさん。

米子で昼食のあと一時五十分、佐太神社（島根県八束郡鹿島町）に向かう。神社につく直前から

雨がバラバラ。ついた途端に雨が降りだした。カメラを気にしつつ、社殿に立とうとするが、「ヒダリヘユケ」と言われたので山を見ることになった。強い雨の中しばらく遊ばせてもらう。皆んながバスにもどりかけたたら雨があがつてきた。

三十分も走ると熊野大社（出雲国風土記には熊野大社とある）に到着。今度は写真がとれるぞと車を出た途端、又も雨による龍神さんの歓迎を受ける。「おおよまと」十一月号の表紙写真が撮れるか心配になった。

ここでは全員拜殿にাগり教長さんを祭主に「ナモタカマノハラ」を三唱する。この間正面の左右にある御幣のうち大きく重そうな右側だけがゆらゆらとゆれていたのが可笑しかった。「ミノノココロヲ トドケルゾ」と突然法主様が話してこられる。そうだ、形ある私達と共にここに来ておられて私達の心を龍神さんにも届けて下さつたのだ。

熊野大社の由緒や行事をたのしく聞かせてもらったあと、皆さんお待ちかねの玉造温泉「長楽園」に向かう。

旅館での大宴会で堺市の杉立かよ子さんが「鈴月かあさん」を演じて皆の感動をよぶ。さすが大倭会と自画自賛。いつもながら予定時間をこえて楽しんだ演芸会であった。

二十九日、旅館を出発。空を見ると、西は晴れているが私達の行くあたりは雲があつた。八重垣神社に到着。ここでも雨による歓迎をうける。

巨勢金岡の筆と伝えられる壁画をゆっくりみせてもらい、鏡の池（縁結び占いの池）に行く途中、原始信仰の形である男根の形をした石棒と女陰を形づくる古木があつて、古代人をしてのぶにはいいものだった。

最後の慰霊地、神魂神社を訪ねた。

風ぐるま

緑の父と呼ばれた日本人

博多にて 矢部 顕

どうしても社殿の前に体が向かないので森の木々をながめて歩きまわる。「ミナトトモニ アイニキテオル」と法主様の言葉。今回は霊界人同士として会いに来ておられるのであろう。

今回の神社訪問はこれで終了。松江市の小泉八雲記念館を訪ねた。『耳なし芳一』を思い出しながら見学をしてきた。

帰り道の夕暮れの空はすばらしいものだった。

9月の博多の街は「福岡アジア・マンス」という催しが開催されていて、あちこちでイベント行われている。アジアフォーカス福岡映画祭、アジア福岡文化賞授賞式、アジア国際見本市、アジア漫画展、児童絵画交流展、アジアの村と村人写真展、ほかにもいろいろ。市役所前の広場では、アジア各国の屋台に舌鼓をうったり、民族舞踊を鑑賞したり昼夜賑わっている、91年のよかとピア（アジア太平洋博覧会）以降続いている行事らしい。「アジアに向かって開かれた国際都市・福岡」のスローガンの流れのもの。悪くはない。九州は、そしてこの福岡は、有史以前から外国とりわけアジアとの門戸であったことは確かな事実なのだから。

明治時代、脱亜入欧をめざして日本が邁進の時代、福岡に玄洋社という政治結社があった。自由民権運動のなかで誕生した玄洋社は、国権主義、大アジア主義へと旋回し、時に武闘主義に踏み込みながらも、一貫

文化行事へのお誘い

世話人 湯浅芳郎

今回は第267回の文化行事になりました。この行事は昭和44年「龍田を歩く」に始まりました。物見遊山でなく神奈備、古代祭祀跡や寺社などを訪ね昔の人との顕幽不二の交流を目指した「心の旅」です。今回の旅も時雨にかすむ霊峰大山や小糠雨の佐太神社など龍神との不思議な出会いがありました。熊野神社では前回の法主様、カーさんとご一緒し出雲大社から火鑽臼と杵を借りに来る話を聞いた時のことが思い出され懐かしい限りでした。大雨の八重垣神社の奇稲田姫命さまは大倭に居られます。雨の止んだ神魂神社の沁みいるような紅葉。小泉八雲の旧居では静かにその地の先人の生活の匂いを感じました。この旅は法主さまの常々話されていた「皆仲良く」する場でもあります。今、忙しさの中に「心の生活」を忘れた私たちのそれを取り戻すよすがとなるものとも思います。来年は月例会も計画します。一人でも多くの方に参加していただき楽しい時間を共有したいと思います。

出雲の越す霊峰色づけり
 火鑽の今年何いふ電太夫
 秋のハルン旧居は客一人

して、近代化を急ぐわが国の「あるべき姿」を求め、その行く末を憂いてきた。同時に、中国・孫文、朝鮮・金玉均、インドのラス・ビハリ・ボース、フィリピンの独立運動家など、祖国愛に燃える多くの人々を支援してきた。それは私利私欲とは無縁の、西欧列強の圧制のなかでの「アジアはひとつ」という燃えるような思いからだったという。

ガンジーとともにインド独立運動の指導者だったラス・ビハリ・ボースの政治亡命を玄洋社は新宿中村屋に頼み、そこで彼はインド式のカレーライスの作り方を教え、それから日本にカレーライスが広まったというエピソードがある。

玄洋社に結集した人には頭山満、広田弘毅、中野正剛、杉山茂丸……。数々の人材を輩出し、1946年にGHQ(連合国軍総司令部)によって解散を命じられるまで福岡を根拠地とした結社だった。

杉山龍丸さんにお会いしたのは福岡国際文化福祉協会設立(1968年4月)のころだった。龍丸さんが招聘されたインド・ガンジー大学副総長カカ・カレル博士一行を奈良、伊勢へ案内す

る乗用車の運転手を大倭紫陽花邑から仰せつかった時が最初だったか。背が高く瘦身、白髪、長いあご鬚、まさしくインドの哲学者風の力カ氏。同じく長身、白いあご鬚で和服姿、明治の風を感じさせる大倭の矢追日聖法主と双壁で、なにか時代が遡った雰囲気のみならず大神神社や伊勢神宮を訪れた記憶がある。(5頁写真はその折りのもの)

私たち学生の仲間は龍丸さんからインドの話や徹して聴くことができた。仮眠したただけで、次の日も精力的にきめ細かにインドの方々の案内を杉山流英語でなさっていたそのバイタリティに驚いた。

らい快復者社会復帰セミナーセンター・交流(むすび)の家建設運動のカンパ集めの街頭募金とらい差別撤廃のアピールのために九州地方一周キャラバン隊のトラックで博多を訪れた時、宿舎の手配から夕食のご馳走までお世話になった。あの時私たちが泊めていたいたのは東公園のなかのお寺だったような、近くに巨大な日蓮上人の銅像があった記憶がある。ご馳走になったのは中洲だったか今となれば定かでない。

「インドに日本は支援として工場をプラント輸

出し建設、稼動しているが、民衆はそれで幸せになるのではない。そこで働ける人はごくごくわずか。インドはあまりにも膨大な人口をかかえた国。生活に必要なものを自分たちで作る技術を伝えたい。日本の手工業の技術や職人の技を全土にひろがるガンジー塾で教えたい。ガンジーが糸紡ぎを奨励したように」。少年の目の輝きで夢を語ってくれた。手工業、井戸掘り、緑化事業、……やることは山ほどある、と。その頃お歳は50歳ぐらいだっただろう。

旧制福岡中学卒業後、陸軍士官学校を出て航空技術将校となる。ボルネオの基地で機銃掃射に多い負傷。病院で敗戦をむかえる。戦後、士官学校



1968(昭和43)・4・16 大塚の斎庭で現在、拝殿の建っている辺り、日聖法主の右がカカ博士、左から

で同級だった人である僧侶からインド人の世話を頼まれたことが契機でインドにのめりこむようになった。ガンジー塾体験から、日本におけるガンジーの弟子となることを決心された。

やがてインドでの緑化事業支援が本格化。民衆の暴動を恐れ農耕具まで所有を禁じた歴史のなかで、荒廃した大地を取り戻すには植林が最優先と思われたのだろう。

木のない山々、砂塵舞う大地、水のない村、貧困にあえぐ民草、ひとたび雨が降れば洪水が襲う歴史の繰り返し。ガンジー塾の指導者たちと6ヶ月間(1962〜3年)もインド中を歩きまわったときに龍丸さんの脳裏に焼きついたものは何だったのだろう。

ハリアナ州シュワルク・レンジは虎と毒蛇の棲家で荒廃した山岳地帯。地元の人怖くて近寄らない場所ということだが、ここを森にすることで裾野の村は救われる、と木を植えることを始めたひとりの日本人。

砂漠と荒野を緑化する方法の研究と実践に資金をつぎ込んでいった国際文化福祉協会は莫大な借入金をかかえ運営されていたが、その返済には祖父の代からの杉山家の土地が切り売りされていた。

祖父は玄洋社の杉山茂丸。中国革命の指導者・孫文と協力して、朝鮮半島から中国東北地区蒙古の乾燥砂漠化に対処解決するという課題に取り組み植林計画を考えていたようだ。父は怪奇小説作家・夢野久作(杉山泰道)。祖父への反発から文学にのめりこみ、日本文学史におさまることのできない独自の境地をもった作家。「夢野久作」(日本推理作家協会賞受賞)という本を鶴見俊輔先生が上梓されている。祖父と父は龍丸さんが旧制福岡中学に在学中に相次いで亡くなられ、17歳で杉山家を継いだ。

福岡市東区唐原にあった4万5000坪の杉山農園は今その名残すらない。かつて私たちが機関紙などを送る封筒の宛先は、福岡市唐原 杉山龍

丸様、これだけで届いた。博多駅からJRで15分ぐらいの都心にきわめて近いそこは、住宅地、病院、ゴルフ場に姿を変えている。

「金をおいもとめる敗戦後の日本社会では、大都市に4万5000坪の土地があるとすれば、これをもとにして土地ころがして金をふやしていく計画をたてるのが常識である。その常識に反して、4万5000坪の土地をすべて使い切る道を歩き終わった人がひとり同時代にいた」(鶴見俊輔氏)龍丸さんを突き動かしたものはなんだったのか。

龍丸さんの長男・杉山満丸さんと博多でお会いし親しくお話をさせていただいた。杉山家の菩提寺が私の事務所から地下鉄で二駅の近さで、龍丸さんのご霊前にお参りしたことはあったが、満丸さんとお会いする機会を逸していた。九州産業大学付属高校の理科の教師をなさっている生物学者である。

「やっ」と結婚しましてね。今までは親父の資料が2部屋以上占領してましたから、嫁さんに居てもらおう場所がなかったんですよ」と冗談めかして語られた。国際文化福祉協会・杉山龍丸の軌跡を知る人は福岡にもほとんどいない。埋もれてしまった偉大な人物の資料を守り、いつか世に知らしめなければならぬ。やっと福岡市立図書館が資料の管理をすることになった。

KBC(九州朝日放送)のTVDキョメンタリー番組制作で、満丸さんはインドを訪れ、シュワルク・レンジに行った。25年前に植えられた木々は立派な緑の森になっていて息をのんだ(表紙写真)。荒れ果てた山岳地帯で恐れられ人が近づくとともになかったこの場所に、なんとリゾートホテルが建っていて、満丸さんたち番組制作クルーはそこに宿泊して取材したという。そして龍丸さん

と共に汗を流して木を植え、灌漑池をつくってきた無名の人々や農業大学の教授たち、農業試験場の人々と、各地で会ってきた。

龍丸さんを顕彰する碑などというものはどこにもない。ある名もない村の中央広場に扉で囲まれた2本の木があり、「杉山の木」と呼ばれていたという(表紙写真)。

しかし、インドの人々の心のなかに龍丸さんは生きている。

「インド独立の父はマハトマ・ガンジー。そして、緑の父は杉山龍丸」

口々に語られたこの言葉。これ以上の評価はあるだろうか。

かつて人間社会の文明化は木を森を収奪することの歴史だった。世界四大文明といわれる地域もいまはすべて砂漠だが以前は森だった。森を拓き畑をつくり、住居を木で建て、燃料も木、輸送手段の船も木でつくり、大量の木材を消費するのが巨大文明だった。他でも、例えばギリシャはいま禿山の岩山に変わり果てている。石の建造物のみが残っているが、屋根だって調度だつてみな木材だった。万里の長城の膨大なレンガは木材の燃料によって焼き上げられた。そのために消費された森林は想像を絶する量で、そのために中国の大地は砂漠化していったこともひとつの事実。

そもそも小麦生産中心で牧畜を伴う文明は森の殺害が激しい。インド、エジプト、中国しかりである。さいわい日本は農業国家になったのが遅く、それも稲作農業で、水を必要とするため平地に限定され、牧畜を伴わないため森林が伐採されて牧草地になることがなかったことがいえる。

「森は、木は、人間が収奪するために存在する、

として疑わなかったインドの人の意識を親父が変えたこと。このことのすごさに感動した」

若き日に龍丸さんと共に木を植え、いま村の長老になっている人が2人の孫をかかえながら、「杉山さんに会った人はみんな彼を信頼しました。そして、将来もこの子たちが杉山さんの教えを受け継ぎ、緑の村をつくっていくでしょう」と語った言葉に、満丸さんは親父の成し遂げたことの偉

大さを言葉にならないほどの感激をもって知った。「有名な学者でもないけれど、政治家でもない

外国人の親父を何故インドの人は受け入れたのか?」ずつと持ちつづけていた疑問の答えの一端

が見えた。父が植え大きく成長した木を抱きしめ、豊かな土壌になった大地に接吻した。

福岡市唐原の杉山農園は跡形も無く消えた。明治時代、杉山茂丸が夢みたアジアの青年のための

農業研修の場としてどれくらい機能したかは知らない。だが数奇な運命をたどった杉山農園は姿を変えてインドに生きている。

玄洋社の「アジアへの燃ゆるまなざし」は、茂丸の孫・龍丸さんのなかに生きつづけたといえよう。

日本では高度経済成長の時代、龍丸さんの仕事や提言はほとんど評価されなかった。

インド北西部タール砂漠の緑化に挑戦しようとしたやさき刀折れ矢つきた。無念……。

1987年9月、福岡県小郡市の病院で69歳の生涯を閉じた。

「おまえには1円の財産も残さない」といわれ育ってきた満丸さんは、大学を卒業して博多に戻ってきた。戻ってきてよかったと思っている。

ある出版社が青少年のための本・杉山龍丸の生涯『グリーン・ファザー』(※ひくまの出版)

杉山満丸著/2001年12月10日発行)を出版しよう準備をすすめている。刊行が待ち遠しい。

いま当時は比べものにならないほど地球規模の環境問題や国際協力が叫ばれている。時代は変わり、たくさんの人々が、組織がこれらの問題にかかわっているが、彼の仕事と人生から学ぼうとする人は未だいない。

西欧文明に追いつこうとし、科学技術の飛躍的進歩でゆたかな富を手に入れ突き進んできた果ての公害や自然破壊の今の時代。忘れ去られたもの

のようにやく気づき始めた。西欧近代思想の人間優位の哲学、自然征服を善とする思想とは異なり、自然と人間が一体だった時代が長く、自然との共生の智慧をたくさんもっていた日本人の自然観や生命観。人間は自然の中で何ら特別な権利など

はっていない、自然支配ではなく人間と自然が共存する思想を今の私たちが蘇らせることが必要

なことはいまでもないが、それをもって世界に発信することができないものか。

私たちの近くに誇るべき偉大な先達があった。国際貢献とやらで自衛隊を派遣することよりも、もっともつとやることがある。

(2001・9・23)

龍丸さんと大倭のお付き合いについて

昭和40年1月号『大倭新聞』第6号で、杉山龍丸さんに「此の度突然、鶴見俊輔氏の御紹介で、今村忠生氏の御訪問を受けました」という書き出しでご寄稿頂きました。以来、昭和62年10月号『おおよまと』通巻206号で、法主様が「故杉山龍丸さんを追憶する」という特集記事に書かれて

いるように龍丸さんは親しい存在となりました。昭和41年12月には大倭印刷所で「インドをあるいてーガンジー翁のあとをつぐ人々」という本を刊行しておられます。

(編集部)

(6)

ひとり芝居

「地面の底がぬけたんです」

を企画制作して

木村聖哉



去る十月六日（大阪）、七日（京都）、八日（鳥取）、結純子さんのひとり芝居を公演した。

新聞各社がこれに注目し、大きく取り上げてくれる一方、主催者が必死でチケットを売ってくれたお陰で、どこも予想を上回る盛況だった。

芝居の内容も好評で、観に来てくれた人たちに大きな衝撃と深い感銘を与えた。

そのことは会場で配ったアンケートに対する観客の感想を読めばよくわかる。いま私の手元にあるアンケートからいくつか抜粋して紹介しよう。

●結純子さんの演技、本当にすばらしかった！涙が出てしまいました（大阪）

●すごい衝撃でした。これほどのテーマはないと思います。ありがとうございました（大阪）

●単にハンセン病の方のとても苦しい人生を知りな人間の尊厳をうばわれたような人生を知りな

さいという押し付けがましいものでなく、ハンセン病という運命を背負った藤本としさんの生きざまをしみじみと感じる芝居だったと思います（京都）

●私はとても元気をいただきました。このお芝居を各地で上演してほしい（大阪）

●言葉で言い表せないほどの感動と心の痛みを感じました。自分を今一度見つめ直してゆきたいと思います（鳥取）

こうして書き写していると、私自身も目頭が熱くなる。この公演を主催してくれたFIWC関西委員会、京都・論楽社、鳥取の徳永進さんとごぶし館のみなさん。ほんとうにいい仲間といってお客さんに恵まれ、感謝の気持ちでいっぱいである。

なぜハンセン病者をテーマとしたひとり芝居を今回プロデュースしたのか？これはもう因縁としか言いようがない。

三十数年前、同志社大学教授だった鶴見俊輔さんから知人のらい（ハンセン病）患者が東京YMC Aで宿泊を拒否されたという話を聞いたのが、すべての発端である。

そのときFIWC委員長だった亡友・柴地則之（元大倭殖産社長）が「それじゃ、おれたちでらい回復者が泊まれる家を作ろう」と決意。

その柴地くんの心意気に共感して大倭の法主さんが土地を無償で提供してくださった。

それから四年かかって一九六七年「交流の家」が完成、飯河四郎・梨貴夫妻が東京から奈良へ移住して管理人になられた。

その梨貴さんが邑久光明園の藤本としさんと親しく、としさんの随筆集を東京で出版したいと数社に話を持ち込んだが、ことごとく拒否。

その話を思想の科学社にいた畏友・那須正尚が聞き、義憤を感じて出版に尽力した。

こうしてとしさんの随筆に彼女の聞き書きを加えた藤本とし著『地面の底がぬけたんです』が日の目を見たのが一九七四年。以来、地味ながらこの本は版を重ね、思想の科学社のロングセラーになっている。

この原作を舞台化したのが今回のひとり芝居だが、結純子さんと出会わなかったら、舞台化など思い付かなかっただろう。何事も出会いである。

たまたま三年前、彼女のひとり芝居を観た。高村光太郎の「智恵子」と宮沢賢治の「祭りの晩」だったと記憶する。それを観て彼女の感性のみずみずしさと表現力の豊かさに感心した。

ある日、彼女から「ひとり芝居になるような作品がありませんか」と相談を受けた。

その時、ふと思いついたのが『地面の底がぬけたんです』というわけ。

今は亡き柴地くん、法主さん、飯河さん、那須さんらの霊に導かれたのだろうか。

今夏、国はハンセン病者の隔離政策の過ちを認め、患者に謝罪し、賠償を支払うことになった。

しかし、ハンセン病への偏見と差別は根強く、患者および元患者の名誉回復・人権回復はこれからであろう。

ひとり芝居「地面の底がぬけたんです」は藤本としという患者の苦難の生涯を彼女が紡いだ生き生きとした言葉で再現する。だから、観る者の心にまっすぐストレートに響く。

終幕近くで、「闇の中に光を見出すなんて言いますけど、光なんてものはどこにもあるもんじゃない。自分が光になろうとすること、それが闇の中に光を見出すってことじゃないでしょうか」と言う場面があるが、ここは圧巻だ。

初演が好評だったので、来年からは各地で公演したいと思っている。

あじさい日誌

11月11日 午後2時より拜殿において大倭会文化講演会が、野本三吉さんを講師に「アニミズムの世界―沖繩・龍神…」
 〓故山尾三省さんを偲びつづ〓
 というテーマで開かれました。とても力のかもったお話で、それぞれの胸にひびくものがあつたと思います。三省さんもきつと喜んでくれたのではないでしょう。参加者は約75人で、関東方面から9人、中部北陸方面から8人、中国四国方面から3人、奈良以外の近畿から22人と遠くからたくさん来てくれました。講演会後の大倭会館での懇親会には54人が参加、飛び入りの演奏があつたり、お一人お一人のバラエティに富んだお話が聞けたり、楽しい時が過ぎたと思えます。(T)



11月12日 朝、野本三吉さんや

多くの方が大倭神宮に参拝、昼過ぎまで歓談して邑を出発されました。

また屋久島の手塚賢至夫妻が都合で一日遅れの来邑、三吉さんたちと合流、一泊されました。
 11月15日 大倭神宮月次祭。この日はちようど七五三に当たり、3歳の築林飛翔くんと吉田彩夏ちゃんがお参りしました。奇稲田姫さんから「イワイコトホグ」とお祝いの言葉を頂いたようです。(P)

また東京から治郎丸明穂さんが久し振りに大倭殖産の小倉重武さんと共に参拝されました。
 11月17日 交流の家でFIWCの定例委員会があり、命日の近い故飯河梨貴さんに黙祷をして一緒にご飯を食べました。

翌日午後、交流の家を特定非営利活動法人(NPO)化するための検討会が開かれました。
 11月19日 大倭病院の内科、櫻井ドクターが結婚されました。

11月23日 大倭大本宮月次祭。午後4時から大倭会館で大倭会幹事会が開かれ、年末年始の行事の打ち合わせをしました。

11月24日 午後6時半より大本宮拜殿において第8回備中神楽が催されました。子供達は「松ノ尾さん」と遊んだり、「八岐大蛇」をおそろしがつたり、大変かわいらしいことでした。

11月29日 佐渡の平田弘之・緑夫妻が、三省さんのお参りに屋

久島まで行った機会に来邑し一泊。元の職場である菅原園を訪ねたり、邑人(頭幽の)と旧交を温めました。今年、平田さんの民宿「桃華園」に泊まったばかりの昇ちゃんの喜んだこと!

12月1日 大倭殖産の吉澤光夫・秀子夫妻の長女、由紀能さんが、田上芳孝さんと奈良口イ

ヤルホテルで挙式されました。
 12月4日 大倭神宮で午後2時より金鶏祭が行われました。社務所では『ながそねの息吹』を読んでもらって勉強(?)をしました。いつもは仕事優先の大倭の各事業所の責任者達も顔を出したり、また東京の濱崎加奈子さん、京都の太田達さんが参拝されました。

12月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑倭の会。

12月7日 皇太子家の新宮様のお名前が「敬宮愛子」と発表されました。

すぐに大倭病院正面の「相互而敬愛」の碑を思い出した。法主様が病院を創立された時、ここに集まる職員さんも患者さんも共に敬愛の心を持ってほしいと、願うての言葉である。次の日、朝から大倭病院の永田喜代子総婦長からも電話があり、改めてその言葉が心に刻まれたとの思いを伺った。(P)

12月9日 朝8時から大倭墓地の大掃除。9時から紫陽花邑の大掃除。邑人、大倭会、FIWC

C等々、多くの皆さんの協力です事に終わりました。
 大倭安宿苑では

12月8日 奈良信用金庫学園前支店恒例の餅つき慰問が、今年には須加宮寮で行われました。(菅原園)

12月5日 奈良県心身障害者作品展に出品した任死者3人が、会場の県文化会館に行き、見学と喫茶を楽しんできました。(須加宮寮)

11月15日 恒例となった青垣園との施設交流会が奈良パークホテルで行われ、久々の再会を喜び合いました。

12月4日 前述の作品展を見学。日野四郎さんが陶芸作品で優秀賞を受賞しました。(長曾根寮)

11月15日 この日は4階で寮長を囲み定例懇談会、各階で11月の誕生会がありました。3階では2チーム対抗のしりとりが結構盛り上がりしました。(八重垣園)

12月1日 無事、開設6周年を迎え、お祝いの行事がありました。

あんない

*大倭神宮(年始祭)
 1月1日(祝) 午後0時半から紫陽花邑内の諸霊への挨拶。午後2時から大倭神宮の年始祭。

*月次祭(大倭神宮)
 1月6日(日) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催第三八回祝会
 1月13日(日) 午後2時より大倭大本宮拜殿にて。

禊(みそぎ)とは、自己本霊を覆っている枉罪(まがつみ)を祓(はら)い加美のお徳を戴(ま)くこと。「つみそぎ」と「みいずそそぎ」という言葉が一体となつてきた大和言葉。

禊には、知恵の研鑽によって表面から枉罪を除く方法と本心、本霊の働きのよつて内側から除く方法とがある。

*大とんど
 1月14日(成人の日) 午前10時より大本宮西の斎庭で、大とんどをしてお正月の松飾りなどを火にあげる神事です。

大とんどは毎年、成人の日(1月の第2月曜日)に行われることになりました。

*月次祭(大倭神宮)
 1月15日(火) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大本宮)
 1月23日(水) 午後2時より大倭大本宮拜殿にて。

編集後記

▼矢部頭さんの「緑の父と呼ばれた日本人」の掲載と、ひくまの出版の『グリーン・ファザー』の発行が、同じ12月になった。仕組んだわけでもないこのタイミングが嬉しい!(春)